

みんなの環境

第10号 2007年7月20日

編集/発行 あつぎ環境市民の会

http://www.geocities.jp/atsugi_kankyo/

厚木のツキノワグマ 凶暴な猛獣なのか？

青砥航次

5月、市内の民家近くでイノシシ捕獲用に仕掛けられた檻にクマが入り、そのクマは射殺された。6月にも市内のハイキングコースでクマの目撃情報があった。

昨年来、日本の各地でツキノワグマの出没が相次ぎ捕獲された数は5千を超えた。

日本のツキノワグマ生息数は正確には分かっていないが、1万頭から2万頭の間だろうと言われている。里に相次いで出没するクマは、山の中で十分増えすぎてあふれ出てきたのだろうか？……どこからもそんな声は聞こえてこない。大方の意見は山の中が住みにくくなったからだという。このままで行けば日本からツキノワグマはいなくなってしまう恐れがある。

ところで、ツキノワグマは猛獣として恐れられている。身体は大きいし、鋭い爪があるから。

でも、食べているものは何か？蜂蜜が好きなことはよく知られている。雑食だが植物が多く、春には山菜採りの人が出会って事故に遭うことがある。秋には木の実が中心になる。

性質はおとなしく、通常は人を恐れている。

ある研究者から聞いた話では、発信器を付けて行動を調べると、行動圏はかなり広く、人には見つかっていないが丹沢山麓部では人家の近くまで来ていることがある。十数年前の話である。餌を探しておそろおそろ人家近くまで来ってしまうようだ。

最近、厚木で相次いでツキノワグマが見つかったのはどうしてか？

丹沢ではブナ枯れが問題になっているが、ブナの実が餌として重要だし、ねぐらとして大木のうるも必要だ。また、シカの影響もあり下草が少なくなってツキノワグマには住みにくい山になっている。シカが増えているのは地球温暖化の影響もあるとの説がある。

仕方なく、里に出たツキノワグマは人家近くで食物をあさるようになる。そのうちだんだん人が怖くなくなり姿を見せるようになる。ツキノワグマは望まなくても人と遭遇したときに身を守ろうとして事故が起きる可能性がある。

人家近くに出没するツキノワグマは生け捕りにして、唐辛子スプレーなどでいやな思いをさせて山奥に放すのがいま推奨されているやり方だ。

人との不幸な遭遇を避けるためには、人が近くにいることを知らせることだ。厚木市では対象地域の子ども達に鈴を配ったと言うのが有効である。

長い目で見たとき、丹沢の自然再生が大事だが、とりあえずはツキノワグマとの上手な付き合い方が必要だ。50頭とも30頭とも言われる丹沢のツキノワグマがこれ以上殺されることの無いよう望みたい。

この機関紙にみなさんの環境への思いや情報を載せましょう。原稿は随時受け付けています

お地蔵さんの佇む里山〔3〕

櫻井 武

3 荻野川野鳥歳時記

行政当局が確認していないという「オオタカ」の営巣確認を目的として観察を始め、生態を把握するためには彼らの日常の生活の場、つまり「生活の視点」に立って観察を重ねた結果連続して「営巣・巣立ち」を確認し、これをもとに関係方面に生息環境保全について要望したが残念ながら進展は見られなかった。

そして、荻野里山の野鳥の生息環境を保全するためには、多くの方に野鳥の生態に関心を持ってもらい観察の輪を広げる以外に方策はないという結論に達したのである。

当面は、仲間とともに日常生活の行動のなかで野鳥の観察体験を積み重ね観察をおして確認した野鳥の生態について「荻野川野鳥歳時記」としてまとめシリーズとして広報していくことにした。

こうすることによって野鳥に親しみを覚えてもらい生息環境の保全、さらに里山の環境保全の必要性を共有するための啓発に結び付けたいと願望している。環境保全の必要性を共有するための啓発に結び付けたい。

第1回目の荻野川野鳥歳時記は「あつぎ環境市民の会」狩野代表の配慮により「みんなの環境展」2007に出展させていただいた。



里山の野鳥歳時記 —荻野 里山のオオタカ—

荻野鳥獣観察会の原点である「オオタカ」の生態観察をおして、里山一帯で日頃多く見られる「監視・飛翔」する姿と異なり、偶然遭遇した猛禽本来の生態を荻野川野鳥歳時記として報告します。

1 オオタカ

1) 食痕

ア ドバトの羽が散乱している。

a) 荻野小学校前坂を下り運動広場裏の出入口

b) 市川宅門入口の畑

c) 金山橋上流右岸竹林の入口

d) 鷺坂橋先き左岸の広場

イ キジバトの残骸

銅座橋下流左岸土手の草むら

ウ コジュケイの羽散乱

銅座散策路洞穴の前

エ コサギ・アオサギの羽散乱

広町公園（竹藪）

オ カルガモの羽散乱

弁天橋橋脚のコンクリート台

カ カラス

銅座橋下流右岸土手、内臓のないまだ暖かい骸。銅座金山一帯で羽散乱

2) 狩り

ア ドバトを足に下げて荻野小学校方向から飛来し、弁天橋上流右岸田圃に降りカラスのモ

- バリングを受ける。
- イ ドバトを足に下げてみはる野方向から飛来し、弁天橋を越えて右岸竹林に入る。羽毛が川面を覆う。
- ウ 上流横林方面から飛来したカルガモの群れを監視場から襲い掛かる（金山橋まで追ってから反転する）
- エ 監視場から急降下して下河原の田圃の「はせ」に降りる。
- オ 調理場（現在第3展望台）の監視場から急降下し左岸馬場の田の「はせ」に降りる
- カ 馬場先きの川面に群れるコガモをめがけて右岸の梅林から飛び出す。

「荻野鳥獣観察会」 観察結果から抜粋（17.8～18.11.15 実施分）

追記

オオタカが生息するためには豊かな生態系が確保されていなければなりません。私たちは生息環境なくなく自然環境の保全のため努力しなければなりません。里山のコナラの木が3月に入って伐採されているのを中止してもらいました。

2 荻野川野鳥歳時記（みんなの環境展 2007 に写真展示）

- | | | |
|-----|------------|---|
| 1) | アカハラ | 11月頃になると堤防・林縁に姿を見せる。 |
| 2) | バン | 9月頃から荻野川の岸边に姿を見せる。 |
| 3) | アオゲラ | 下河原の桜の木の幹に足と尾でとまる。 |
| 4) | ウソ | 11月頃、里山の桜の枝に群がり花芽をついばむ。 |
| 5) | クイナ | 11月末、冬枯れのアシや草の根元に姿を見せる。 |
| 6) | カシラダカ | 11月に入ると冬枯れの灌木・枯れ草で見られる。 |
| 7) | ベニマシコ | 19.1.1～4日岸边のアシの茎・枯草に姿を見せた。 |
| 8) | キンクロハジロ | 川面でカルガモの中に混じっていた。
参考：19.1.4 ♂ .11～24日♀（前回確認 17.2.27日♂） |
| 9) | クサシギ | 17.11 岸边に姿を見せたがその後確認出来ない。 |
| 10) | オオタカ | 里山上空 12月頃から確認機会が増えて来た。 |
| 11) | カワウ | この時期になると装いが一変する。 |
| 12) | タシギ | 堰の周り、岩の間など淀んだ所に姿を見せる。 |
| 13) | カワセミのホバリング | 野川流域ではカワセミのホバリングしている姿がみられる。
(荻野鳥獣観察会会長) |

☆アンケートのお願い☆

あつぎ環境市民の会では活動を円滑に進め、効果のある事業を行うため会員のみなさまにアンケート用紙を配布します。お手数ですがご協力のほどお願いいたします。

あつぎ環境市民の会では2007年度の会員を募集しています。

あつぎ環境市民の会は、自然環境保全、地球温暖化防止、ごみ減量、環境学習などの環境活動を実践している市民が集り、平成16年4月に発足しました。
ただいま会員（年会費は2,000円）を募集しています。会員は環境保全や地球温暖化防止のボランティア活動に参加できます。また、会報「みんなの環境」で価値ある環境情報を得ることができます。申込みは電話046-224-5010（狩野）まで。

スイスアルプスの真珠 サースフェー村を訪ねて

狩野光子

環境問題が頭から離れない私に「すこし頭を冷やしたら？」と家族にスイス旅行を薦められ、綺麗なお花畑でも見て気を取り直そうと、先月、《アルプスの真珠》氷河の村で有名なサースフェーに出かけた。



写真 上〇

下〇

成田からチューリッヒまで 13 時間、チューツリッヒから電車とバスに乗りかえて、氷河の侵食でできたというサースフェーへ。村の中は電気自動車以外乗り入れ禁止になっていて、荷台つき電気自動車に乗りかえやつとホテルへ着いた。厚木を出発してまる 1 日以上たった。ヨーロッパ・アルプス山脈は、1850 年から 130 年間でにかけ氷河の面積の 1/3 を、体積の 1/2 を失ったという。特に 2003 年ヨーロッパを襲った猛暑以来、氷河の後退はすさまじく多いときでは 1 ヶ月に 3m も後退した時があり、このままでは 10 年もしないうち氷河が消えてしまうのではないかと、現地の日本人観光ガイドの方が心配そうに話してくれた。かつては、夏に雨が降っても高地では雪となり氷河に降り積もっていたが、近年では雪は降らず雨となり滝となって氷河を消してゆく。

黒く露出した岩肌が緩み、あちこちで崩れ落ちているのが見えた。とうとう、氷河の上に塩ビシートを被せて、氷河の侵食を止める試みまで始まった所もあるそうだ。

一方、村の人々は小さな庭で野菜を作ったり、刈り取った草花を家の 2 階のベランダで丁寧に干草にしているのが見えた。草花 1 本たりとも自然の恵みを大切に、大自然の中で穏やかに美しくゆったりと暮らしているようであった。ホテルの玄関脇には、唐松を割った薪束の上に、お花やてんとう虫、ちょうちょうなどで作った小さなオブジェがそっとおいてあった。また住宅の 1/5 は地元の材を使用しなければならないという決まりがあるらしく、お招きいただいた家は 100 年以上経った木造建築だったが、内部は地元の唐松をふんだんに使って素敵にリフォームされていた。

わが家でも 4 年前、神奈川県産材にこだわりリフォームしたが、東西を問わず持続可能な地球環境を思うと、再生可能な地元木材を大事に使うことや、すべての命が繋がっているとの思いに至るのであろうかと嬉しくなった。

みんなの環境 第 10 号 2007 年 7 月 20 日発行

編集・発行 あつぎ環境市民の会 代表 狩野光子

電話/FAX 046-224-5010 e-mail: mitsuko-karino@ayu.ne.jp

制作 長岡 恂 e-mail: jun.nagaoka@nifty.com

事務局 〒243-0817 厚木市王子 2-14-3 山中延明 方

電話/FAX 046-224-9698 e-mail: ANA40480@nifty.com

郵便振替口座 00200-7-132779 (年会費 2000 円)

(C)あつぎ環境市民の会 2007 年